

## 京都の火災図 京都市歴史資料館蔵大塚コレクションについて

伊東 宗裕\*

### ■はじめに 大塚コレクションについて

本稿は、京都市歴史資料館に所蔵する大塚コレクションの中から、とくに京都の火災に関するかわら版類の紹介を目的とする。以下は大塚コレクションの紹介だが、一般的な京都の火災資料にも該当するところであり、むしろ力点はそちらにあると理解していただきたい。

大塚コレクションは、上京区在住の大塚隆氏が蒐集された、古地図を主体とするコレクションである。大塚氏の蒐集品は古地図、かわら版、古文書、吉田初三郎鳥瞰図（原画および刊行図）など多岐にわたる。江戸期の刊行京都図については同氏編の目録<sup>1)</sup>でその大略をうかがうことができる。

江戸期刊行図は2001年に京都大学へ寄贈され「大塚京都図コレクション」約三百点の目録が公にされている（附属図書館所管）。<sup>2)</sup> このほか内容に応じ、滋賀県五箇荘町や京都府宇治市などにもそれぞれ蒐集品が寄贈されている。

報告者の属する京都市歴史資料館には、手書き京都図、内裏図、一枚刷りなど約千点が2001年に寄贈された。すべてを包括し「大塚コレクション」の名称で管理し利用に供している。とくに、京都の火災のみに関するかわら版類は85点を数え、その点でも非常に充実したコレクションになっている。末尾にその略目録を掲げ、以下図版を掲出するときには表中の登録番号を記した。

### ■大塚コレクションの火災図

かわら版の定義は人によってまちまちだが、最大公約数をまとめると左のようになる（と筆者は理解している）。

- ・一枚の紙に印刷された刊行物である

- ・起きたばかりの事件を伝える
- ・出版許可を得ずにゲリラ的に出される

ところが一般に「かわら版」と呼ばれるもののなかには、事件が起きて相当の時間がたち刊行されるもの（回顧的）や、地図業者が既存の出版図を利用し、刊記もそのままに（非ゲリラ的）に出されるものもある。また、手書きでニュースを伝えようと書かれた（と考えられる）ものもある。

火災の状況を伝えようと描かれた、図を主体とした一枚で完結した資料を「かわら版」と総称するのは正確ではない。そこで、刊本写本の別を問わず「火災図」と報告者は呼ぶことにしている。大塚隆氏も「焼場図」と称している<sup>3)</sup>のは報告者と同じ趣旨からであろう。

「火災図」とひとくくりにすることで、写本も刊本も、既存図を利用したものも、後年に回顧したものも、すべて包含された火災情報概念として利用できる。なお、刊行されたかわら版類を包括した「摺物」という用語も提唱されている。<sup>4)</sup>

### ■京都の火災

京都で発生した火災の中で、大塚コレクションにおいて火災図が残っているものは、左のとおりである。なお、他のコレクションを参照してもほしい左の範囲におさまっている。

- 1 寛文13年5月8日 関白鷹司房輔第より出火、禁裏以下、百余町五千余戸焼失。
- 2 宝永5年3月8日 油小路通姉小路通角より出火、497町、百余の寺社、一万四千軒余を焼失し、翌日午前2時過ぎ鎮火。（宝永大火）
- 3 享保15年6月20日 上立売通室町西入ル上立売町より出火、翌日に及ぶ。西陣108町が焼失。（西陣焼け）
- 4 天明8年正月30日 鴨川東の団栗図子より出火。

\* 京都市歴史資料館



火は鴨川を超えて寺町四条下る永養寺に引火。禁裏、二条城をはじめ37社、201寺、1,424町を延焼し、2月2日早朝鎮火。東は二条新地、西は千本通、北は今宮御旅所、南は七条通の範囲で、約65,300世帯が罹災。(天明大火・申年大火)

5 弘化3年閏5月19日 四条道場金蓮寺境内より出火、北は錦小路、南は綾小路、西は高倉辺までが焼失。

6 嘉永3年3月16日 白山通樋口(下京)より出火、五十町ほど焼失。

7 安政元年4月6日 内裏が炎上し、孝明天皇は下鴨社へ避難。この火災で西は千本、北は今出川、南は下立売まで焼失。焼失の町数は190、寺社24、家数五千軒を超える。現京都御所はこのとき焼失した内裏を再建したものが基礎になっている。

8 安政5年6月4日 諏訪町万寿寺より出火、南は六条村、西は新町、東は柳馬場辺まで焼失。これにより、東本願寺枳殻御殿(枳殻邸)も焼失。

9 元治元年7月19日 長州藩と幕府側との戦端が開かれ、長州藩が敗れる。(蛤御門の変・禁門の変)。これにより洛中は兵火に罹り、町の焼失数811町。21日に鎮火する。(鉄砲焼け・どんでん焼け)

10 慶応元年3月26日 祇園町に火災、祇園新地、建仁寺など30町が焼失。

11 慶応4年正月3日 鳥羽伏見戦勃発により、伏見を中心として戦火にかかる。

## ■火災と火災図

前項の火災と大塚コレクションの火災図との対比を以下に一覧する。図番号のあとの4桁の数字は大塚コレクションの整理番号である。

### ・寛文13年火災から西陣焼けまで

全4点。寛文13年火災が1点、宝永5年火災が2点、享保15年火災が1点。ただし宝永5年火災のうち1点は写本。他は既存の刊行地図の上に焼失範囲を線描または朱塗りで表示している。はたして「かわら版」的な製作をされたのか不明である。例として寛文13年火災の図を図1(0368)に掲げた。朱で示した焼失範囲はモノクロではほとんど見えない。

### ・天明8年大火

全8点。うち一点は写本。他はすべて既存の京都地図



図1

を利用し、その上に合羽刷で焼失範囲を塗ったもので、文字は記されていない。板木さえあればすぐにできた。例を図2(0330)に掲げる。モノクロ図版ではわからないが、市街地部分がほとんど朱で塗られている。

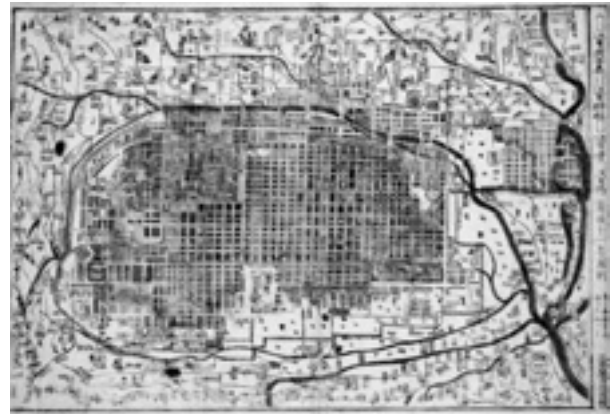


図2

天明大火は京都市街のほとんどを焼き尽くす火災であり、かわら版の発行者も罹災しているはずであり、その中で発行するには既存図を利用する方法がとられると推測できる。したがって、既存図の版元が発行者という点ではゲリラ的とはいいかねる。

なお、既存図を使用することは、江戸・大坂でも同様であり、初期災害かわら版の特徴である。

### ・天明8年大火と元治元年大火の間

天明大火と元治元年大火のはざま、約80年間に京都ではいくつかの火災が発生した。火災図が出されるような大火は、弘化3年閏5月19日の四条通火災、安政元年4月6日の上京火災、安政5年6月4日の下京火災が

ある。大塚コレクションの火災図は全 28 点。うち 2 点は写本。

この時期の火災図は、焼失範囲を図で示し、さらに文章で出火の経緯や被害規模を記し、それ自体で完結した火災記録になっている。また「京都出火」「京都出火略図」のようなタイトルを記し、出版物としての体裁を整えている。例として安政 5 年 6 月 4 日下京火災の図を図 3 (0267) に掲げる。



図 3

これらの火災はいずれも規模が大きいとはいえ、洛中全域を焼くようなものではなく、出版元にとっても丁寧な印刷が可能な状況であったのだろう。

#### ・元治元年大火

全 30 点。うち写本 1 点。元治大火火災図版は三段階を経ているのではないかという印象を報告者はもっている。天明大火規模の洛中を焼き尽くす火災だから、最初は既存図を利用した簡単なものしか出せない。この例が図 4 (0292)。左下隅には版元の名前が明記されている。次の段階で、焼失範囲の図示と経緯・被害を記した体裁を整えたものになる。この例が図 5 (0285)。第三段階

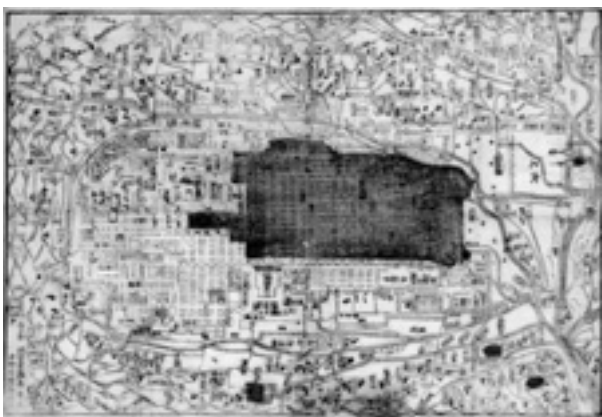


図 4



図 5



図 6

として、図 6 (0307) のような多色刷の詳細版が出ている。多色刷詳細版の詞書に「今迄出版せし■摺の画図と此画図と御見合可被成」と記すことは、このことのあらわれである。

第三段階の「保存版」ともいべき多色刷火災図は、技法の点でもおそらく複数の版木を使用して比較的複雑な工程を経ている。それまでの印刷火災図の彩色が合羽刷という、一種のステンシル技法であったのにくらべ、時間とコストと技術を費やしている。同様のものは江戸において安政地震時に出版されている。この地震時には、やはりいくつかの段階にわかれてレベルの異なるかわら版が出されているようである。おそらく京都でも江戸の例を学んで出されたのだろう。

元治大火火災図の特徴は、最初に述べたように、兵火による火災だということにある。それが火災図にも反映されている。図 5 の詞書に「元治元甲子年七月十九日朝五ツ時分河原町二条下ル■■■■より出火」と記す。■■の部分には原版(板木)を削りとったような痕跡があり「敷」の字がうっすらと見える。おそらく「長州屋敷」と記されていたのであろう。

この大火の火災図は、どれを見ても通常の火災であるかのような書き方をしている。兵火が原因とは明記しない。しかし洛中とともに、嵯峨の天龍寺や乙訓の山崎も焼失範囲として朱塗りをしている。前者は長州軍の集結地、後者は長州軍陣地で、また敗走の経由地である。もっと極端な例は、御所の前で大砲を撃っている図柄を描いているのに、通常の火災であるかのような書き方をしている。

これらは、幕府に遠慮して、といった自主規制ともみなせるが、むしろ江戸時代の出版物に見られる、おかみのなさに口出しをしない、という基本的な考えのあらわれであろう。事件自体はタブーではなく、市中に出された触書にも「長州人恐多も自分兵端を開き犯禁闕、不容易騒動に相成」と公告している。

#### ・慶応元年祇園町大火

全5点だが、うち2点は近年の複製（影印）。

#### ・慶応四年鳥羽伏見戦

全7点。うち3点は錦絵風の多色刷り。元治大火と同様に、戦火による火災である。ここでは戦いがあったこと自体は記されているものがあるが、室町時代に假託した文章になっている。例は図7（0317）。元治元年大火の例と同様に自主規制とみなすこともないだろう。假名手本忠臣蔵を塩冶判官と高師直の確執に仕立てなおした「伝統」のなせるわざである。おもしろいのは、山崎で合戦が行われたように描かれているものがある（実際には山崎は無事）。これは秀吉と光秀の山崎合戦という、読者がよく知っている故事に假託しているわけである。



図7

## ■火災図の目的

第一に、遠方の親族、取引先等に安否をしらせることが、かわら版自体にうたわれている。「他国へ御文通にて御知せのみぎり此絵図御さし込被遊候はゞ早速相訳り」「他国へ御知せの砌先方にて早く相わかり申候」といった決まり文句が記された。この意味でもっとも直截なのは、かわら版とは異なるが、飛脚屋が発送した火災ニュースがある。これは江戸の例であり、京都で実例があるかどうかは未詳。特徴として木活字を使用していることがある。板木を使う整版と異なり、短い文章であれば熟練していなくても組版ができて、即刻荷物と一緒に発送できる。

第二に、みやげ物としての利用。一口にかわら版といっても、粗末な紙に単色で刷ったものから、多色刷りの「版画」と称すべきものまである。上質なかわら版はみやげ物として長期の需要を予想しなければ出版された理由がわからない。

## ■火災図の所在

前項で述べたことが実際に行われたら、京都からよそへ（他国へ）送られたものが多いから、京都以外の土地に残ることが多いはずである。しかし、まとまって残ることがなく、しかもその土地の資料ではないから地域史における注目をあびることは少ない。

現在、かわら版研究の主要な材料になっているのは、何人かのコレクターの努力のたまものである。報告者が把握している、京都の大火かわら版を含む国内の主要なコレクションは、(1)東京大学大学院情報学環図書室(旧東京大学社会情報研究所)の小野秀雄コレクション(2)刈谷市立刈谷図書館の佐藤コレクション(3)京都市(現大津市)の山名コレクション(個人蔵)が知られている。

(1)はネット上で画像が公開されている。<sup>5)</sup>

(2)はもと京都市職員であった故佐藤峻吉氏の蒐集。<sup>6)</sup>

晩年に住まれた愛知県刈谷市の市立刈谷図書館にかわら版、番附、名所案内等を生前寄贈された。佐藤氏旧蔵書には「紙魚庵蔵書」の印が押されているので容易に鑑別できる。大塚コレクションにも佐藤氏旧蔵書を見ることができ。

(3)は京都市中京区に住した山名隆三氏のコレクショ

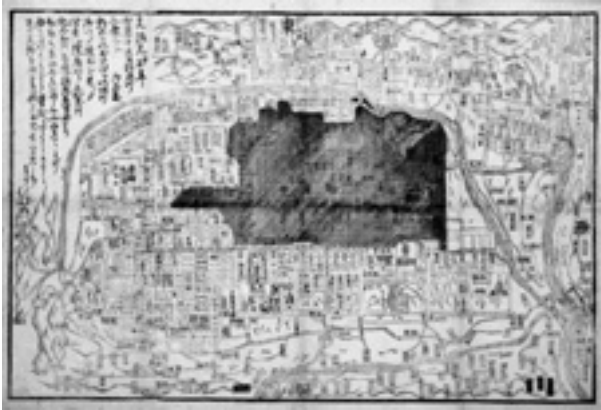


図8

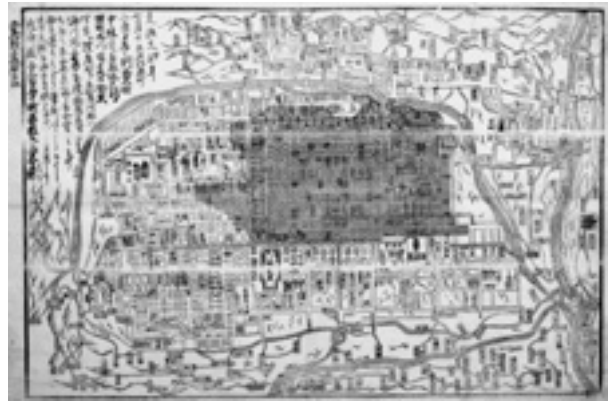


図9

ン。7) 同氏の蒐集はかわら版から錦絵、番附、号外に  
わたり、現在も滋賀県に住み、新聞号外の蒐集を継続さ  
れている。

### ■附記 似て非なるもの

刊行された火災図だけでなく、江戸時代以前の出版物  
は、極言すればひとつひとつが別の「物」だといえる。  
同じ板木を使用しても紙の大きさは刷りごとに異なる。  
また埋木や合板などが明示されずに行われている。

このため、江戸時代までの出版物コレクションの価値  
をはかる目安の一つは、同一（だと思われる）のものを  
多数収めていることである。図書館界では正本がひとつ  
あれば、同一（に見える）書物は副本として排架しない  
（しなかった）。しかし、江戸時代以前の刊本に関しては  
これは困ったことなのである。

大塚コレクションの火災図には、一見同じに見えるも  
のがある。ところを、これをよく見ると相違点があきら  
かになる。火災図（かわら版）は粗末な印刷物という先  
入観を裏切る現象である。実例をあげよう。

図8 (0293) と図9 (0289) は元治大火の火災図である。  
文字部分の異同が少しあるほかはまったく同じに見える。  
ところが細かく見ると、図10に見られるように、画面  
上端中央の方角を示す「東」の文字の線の太さが異なる  
のである。つまり両者は異なる原板から作られたという  
ことになる。

もう一例をあげると、  
図11 (0281) と 図12  
(0283) は嘉永7年火  
災の図2種である。見  
出し部分と罹災範囲の  
表示は異なっているが、  
土台になる街路の線や  
名称は同一の板による  
印刷だと感じる。とこ  
ろが仔細にみると、た  
とえば「相国寺」の表  
示が図13のようにか  
たちが異なっている。  
同様に他の線や文字も



図10

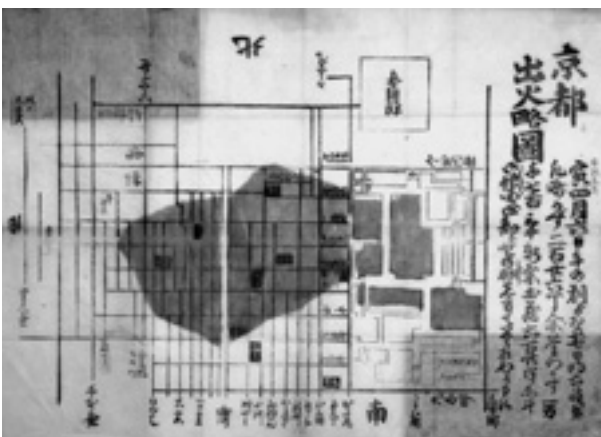


図11

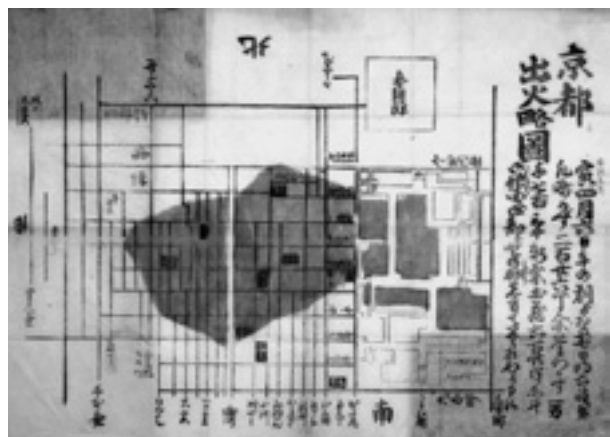


図12

微細な相違がある。つまり同一の板のようにみえて異なる原版を使っているということである。

木板印刷（整版印刷）には「かぶせ彫り」または「覆刻」という技法がある。印刷物を板木に裏返しに貼り付けて彫り、ほとんど同一の板を作ることである。輸入された漢籍の覆刻版を作り、ついでに訓点を附加することがよく行われていた。上の例の火災図の相違は、あるいは覆刻されたという可能性もある。

要点は、火災図でなぜこんなめんどろなことをするのか、ということである。われわれ（少なくともわたしは）かわら版といわれる類の図は、速成の粗末な印刷物だという先入観がある。一回刷ったらもうおしまい、という感じである。そのイメージに反するのである。

覆刻（だとしたら）した理由は（1）いちどに大量のか



図 13

わら版を短時間で出そうとしたので原版を複数作った(2)たくさん刷ったので最初の原版がすり減ってしまったから新しい原版を作った、その時に文字情報を修正・追加したということが考えられる。

上記のことに結論を出せるような材料はない。ただ、江戸時代以前の書誌学の常識をあてはめると、火災図もふくんだかわら版類の研究にあたらしい視点をもたらせるのではないかと考えている。

#### 注

- 1) 大塚隆編『京都圖總目録』青裳堂書店、1981
- 2) 金田章裕編『京都大学所蔵古地図目録』京都大学大学院文学研究科、2001
- 3) 注1) 141頁以下
- 4) 宮地正人編『幕末維新时期摺物（いわゆる瓦版）総合編年目録のための基礎的研究』東京大学史料編纂所、1998
- 5) [www.lib.iii.u-tokyo.ac.jp/pblc-achv/digital\\_archive/ono-collection/](http://www.lib.iii.u-tokyo.ac.jp/pblc-achv/digital_archive/ono-collection/)
- 6) 刈谷市立刈谷図書館編『佐藤コレクション目録』同館、1980に細目がまとめられている。
- 7) 山名隆三編『かわら版図解目録』編者、1994にまとめられている。

表 大塚コレクション火災図略目録

No.	登録	表題	数量	刊写	彩色	備考
01	0368	新板平安城并洛外之図	1舗	寛文12年刊	彩	寛文13年5月8日火災
02	0334	宝永五年子三月京都大火絵図	1枚	写	彩	宝永5年3月8日火災
03	0367	増補京洛中并洛外図	1舗	刊	彩	宝永5年3月8日火災
04	0362	[新板増補享保改正]京大絵図	1枚	享保10年刊	無	享保15年6月20日火災(西陣焼け)
05	0330	手引京絵図	1枚	寛政11年刊	彩	天明8年正月晦日火災
06	0329	京都天明八戊申年大火	1枚	写	彩	天明8年正月晦日火災
07	0327	京都洛中洛外大絵図	1枚	刊	彩	天明8年正月晦日火災
08	0328	(無表題)	1枚	刊	彩	天明8年正月晦日火災
09	0332	(無表題)	1枚	刊	彩	天明8年正月晦日火災
10	0331	(無表題)	1枚	刊	無	天明8年正月晦日火災
11	0366	[再板改正]京絵図	1舗	刊	彩	天明8年正月晦日火災
12	0363	[改正両面]京図名所鑑	1舗	安永7年刊	彩	天明8年正月晦日火災
13	0321	閏月十九日出火之図	1枚	刊	彩	弘化3年閏5月19日火災
14	0322	閏月十九日出火之図	1枚	刊	彩	弘化3年閏5月19日火災
15	0323	京都出火	1枚	刊	無	弘化3年閏5月19日火災
16	0324	(無表題)	1枚	写	彩	嘉永3年4月6日火災
17	0344	(無表題)	1枚	刊	無	嘉永7年4月6日火災
18	0318	(無表題)	1枚	写	彩	嘉永7年4月6日火災
19	0342	京都出火書状写	1枚	刊	無	嘉永7年4月6日火災
20	0294	京都出火図	1枚	写	彩	嘉永7年4月6日火災
21	0278	京都出火略図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
22	0279	京都出火略図	1枚	写	彩	嘉永7年4月6日火災
23	0282	[嘉永七寅ノ年]京都出火略図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
24	0283	京都出火略図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
25	0277	京都大火之図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
26	0280	京都大火之図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
27	0281	京都出火略図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
28	0266	(無表題)	1枚	刊	無	嘉永7年4月6日火災
29	0319	京都大火図	1枚	刊	彩	嘉永7年4月6日火災
30	0296	[安政改元]嘉永七年京師大火図	1枚	写	彩	嘉永7年4月6日火災
31	0297	(無表題)	1枚	写	彩	嘉永7年4月6日火災
32	0325	[寛政新板]手引京絵図	1枚	寛政5年刊	彩	嘉永7年4月6日及安政5年6月4日火災
33	0284	[安政五年六月四日]京師大火図	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
34	0267	下京大火	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
35	0268	京都出火	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
36	0273	京都出火場所附	1枚	刊	無	安政5年6月4日火災
37	0265	京都出火略図	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
38	0274	京都大火	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
39	0272	京都大火場所附	1枚	刊	無	安政5年6月4日火災
40	0269	極本しらべ[安政五年六月四日午ノ刻より]京都出火	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
41	0275	(無表題)	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
42	0276	(無表題)	1枚	刊	彩	安政5年6月4日火災
43	0289	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
44	0292	京名所独案内〃	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
45	0293	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
46	0301	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
47	0302	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
48	0326	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
49	0365	新版京之図	1舗	文久3年刊	彩	元治元年7月19日火災
50	0290	京名所独案内(?)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
51	0346	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
52	0347	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
53	0335	(無表題)	1枚	刊	無	元治元年7月19日火災
54	0303	[元治元甲子歳]京都大火図	1枚	刊	無	元治元年7月19日火災
55	0308	本しらべ 元治元子年京大焼之図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
56	0345	外御門御固	1枚	刊	無	元治元年7月19日火災
57	0285	京都大火 極本しらべ	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災

表 大塚コレクション火災図略目録

58	0286	京都大火極本しらべ	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
59	0291	(無表題)	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
60	0304	京都大火之図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
61	0287	京都大火之略図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
62	0288	京都大火之略図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
63	0295	京都大火之略図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
64	0306	京都大火之略図	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
65	0270	極本しらべ	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
66	0271	極本しらべ	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
67	0305	京都大火略図	1枚	刊	無	元治元年7月19日火災
68	0307	平安大火末代噺	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
69	0320	京都大火 本しらべ	1枚	写	彩	元治元年7月19日火災
70	0336	[京都大火]大功記十段目抜文句	1枚	刊	彩	元治元年7月19日火災
71	0364	[文久改正]新選京絵図	1鋪	文久2年刊	彩	元治元年7月19日火災
72	0339	京羽二重持丸普請競	1枚	慶応元年刊	無	元治元年7月19日火災後の復興
73	0300	(無表題)	1枚	刊	彩	元治2年3月26日祇園新地火災
74	0309	(無表題)	1枚	刊	彩	元治2年3月26日祇園新地火災
75	0310	(無表題)	1枚	刊	彩	元治2年3月26日祇園新地火災 複製
76	0299	ぎおん新地大火の図 本しらべ	1枚	刊	彩	元治2年3月26日祇園新地火災
77	0311	ぎおん新地大火の図 本しらべ	1枚	刊	彩	元治2年3月26日祇園新地火災 複製
78	0314	(無表題)	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
79	0316	(無表題)	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
80	0317	(無表題)	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
81	0315	[見聞細吟]諸方出火之画図	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
82	0312	城州伏見其外所々出火之図	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
83	0369	城州伏見其外所々出火之図	1幅	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
84	0313	本しらべ 城州伏見大火の図	1枚	刊	彩	慶応4年正月3日火災(鳥羽伏見戦)
85	0298	京都新報 第二拾号	1枚	明治7年刊	彩	明治7年5月10日火災/5月12日付